

2025. 1. 19 (日) 使徒21:15～26

21:15 数日後、私たちは旅支度をしてエルサレムに上って行った。

21:16 カイサリアの弟子たちも何人か私たちに同行して、古くからの弟子である、キプロス人ムナソンのところに案内してくれた。私たちはそこに泊まることになっていたのである。

21:17 私たちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。

21:18 翌日、パウロは私たちを連れて、ヤコブを訪問した。そこには長老たちがみな集まっていた。

21:19 彼らにあいさつしてから、パウロは自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ説明した。

21:20 彼らはこれを聞いて神をほめたたえ、パウロに言った。「兄弟よ。ご覧のとおり、ユダヤ人の中で信仰に入っている人が何万となくいますが、みな律法に熱心な人たちです。

21:21 ところが、彼らがあなたについて聞かされているのは、あなたが、異邦人の中にあるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習にしたがって歩むなどと言って、モーセに背くように教えている、ということなのです。

21:22 それで、どうしましょうか。あなたが来たことは、必ず彼らの耳に入るでしょう。

21:23 ですから、私たちの言うとおりにしてください。私たちの中に、誓願を立てている者が四人います。

21:24 この人たちを連れて行って、一緒に身を清め、彼らが頭を剃る費用を出してあげてください。そうすれば、あなたについて聞かされていることは根も葉もないことで、あなたも律法を守って正しく歩んでいることが、皆に分かるでしょう。

21:25 信仰に入った異邦人に関しては、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、淫らな行いを避けるべきであると決定し、すでに書き送りました。」

21:26 そこで、パウロはその人たちを連れて行き、翌日、彼らとともに身を清めて宮に入った。そして、いつ、清めの期間が終わって、一人ひとりのためにささげ物をするができるかを告げた。

<説教>

「使徒の働き」18章23節から始まったパウロの第3回伝道旅行はエルサレムに到着したことで終わりとなります。本日の聖書箇所は、カイサリアからエルサレムに上って行く場面から始まります。

カイサリアでは皆がパウロに、エルサレムに上って行かないように懇願しましたがパウロは聞き入れようとしませんでした。それで皆もそれが主のみこころだと受け入れたのでした(12-14)。

それから〈数日後〉、パウロたち一行は〈旅支度をしてエルサレムに上って行〉くべく出発しました(15)。エルサレムまで陸路で100kmくらいでしょうか。パウロがエルサレムを目指したのは、アジアやギリシアの諸教会から託された支援献金、物資をエルサレムの教会に届けることが大きな目的でした。改めて祈り、お金や持ち物だけでなく、主の御意思(みこころ)に合わせて自分たちの意思もまた整えました。〈主イエスの名のためなら、

エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟) (13)した〈旅支度) でした。

主のみこころを受け入れた〈カイサリアの弟子たち) も〈何人か) が仲間に加わり同行することになりました。更にパウロたちのために〈古くからの弟子である、キプロス人ムナソンのところに案内してくれ) もしました(16)。

そして〈私たちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれ) ました(17)。〈私たち)、特にパウロがエルサレムで兄弟たち、キリスト者たちから〈喜んで迎え) られたというのは、感慨深い気がします。もともとパウロは熱心なパリサイ派ユダヤ人として〈ステパノを殺すことに賛成し) (8:1)、〈主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻) いていました(9:1)。それでももちろんエルサレム (だけではありませんが) のキリスト者たちからは恐れられていました。またパウロがキリスト者になった後も、彼がエルサレムに来て〈弟子たちの仲間に入ろうと試みましたが、みな、彼が弟子であるとは信じず、彼を恐れてい) ました(9:26)。それから 20 年以上は経っていると思われま。その間にもパウロがエルサレムに行ったり立ち寄りしたりしていることをルカは記しています (11:30、15:4、18:22)。そのときはもう恐れられてはいなかつたし、別に嫌われてもいなかつたはずですが、しかし「喜んで迎えられた」とまでは記されていません。もちろん、わざわざ記する必要も無かつたということだったのでしょうが。とにかく、かつてのパウロの姿からすると、何という変わりようかと思ひます。そして何と言つても、「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」(9:15-16)と言われた主イエスのみことば、みこころが真実であり、着実にパウロの身に行われていたことが分かります。そしてこの後もこの主のみことば、みこころがパウロに行われて行くのを私たちは見るのです。

さて、エルサレムに着いた〈翌日)、さつそくパウロはルカたち同行者たちを〈連れて、ヤコブを訪問) しました。〈そこには長老たちがみな集まってい) ました(18)。この〈ヤコブ) は前にも出てきていました (12:17、15:13)。十二使徒の中のヤコブではなく、主イエスの兄弟のヤコブです。使徒ペテロやヨハネとともにエルサレム教会の中で重んじられている人でした (このときペテロやヨハネはエルサレムにはいなかったようです)。エルサレム教会はヤコブと〈長老たち) によって教えられ導かれていました。

あいさつの後、〈自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ説明) しました(19)。ユダヤ人中心のエルサレム教会でのパウロの報告の中心は、〈自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたこと) でした。それは「律法を持たず、律法を守り行うことができない異邦人に対して、神が恵みによって、パウロを通して主イエスの十字架と復活の福音を聞かせてくださり、主イエスを信じる信仰を与えてくださり、異邦人を救ってくださった。そして異邦の地にキリストの教会を建ててくださった。」ということ です。更には「その、ただ神の恵みにより、信仰によって救われた異邦人の教会に対して、神が、エルサレムの教会から霊的恵みを受けた感謝として物質的な物、お金を献げてエルサレムの教会を支援するという意志をお与えになつたと」ということです。どちらも神の恵みのみわざです。

そんな神の恵みのみわざの証しを聞いて、ヤコブと長老たちは〈神をほめたたえ) ました(20)。エルサレムのユダヤ人中心の教会はかつてもそうでしたが、ここでも「神は、

いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って神をほめたたえたのです(cf.11:18)。誰も神の明らかなみわざを否定することはできませんでした。

しかし、そんなエルサレム教会のヤコブや長老たちには一つの懸念がありました。それは、それほど神がお用いになっているパウロについて、エルサレムの多くのキリスト者の中に、「彼はモーセの律法に背くように異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に教えている」という疑い、警戒、誤解があるということでした(20-21)。それはもちろんパウロに対する名誉毀損ですが、同時にヤコブたちが心配したのはエルサレム教会の中のユダヤ人のことでした。つまり彼らの主イエスへの信仰が揺らぎ、疑い、ついにはまたユダヤ教に戻ってしまうことでした。そして一番の問題は、その結果、神の御名が、栄光が汚され、神がほめたたえられなくなることでした。神はあんな律法違反者パウロをお用いになるというのか。教会はあんなパウロを認め迎えたのか。神も教会もおかしい。信じられなくなった、と。「律法の行いによらず、ただ神の恵みにより、主イエスを信じる信仰によってのみ罪赦され救われる。」パウロにとってはもはや当たり前の真理でした。しかし長年、先祖代々ユダヤ教、律法主義を徹底的に叩き込まれて来たユダヤ人キリスト者たちには簡単に理解し、分かることではありませんでした。まさに聖霊の特別な働き、それも神の恵みによらなければその霊の目は開かれないのでした。

そこで、ヤコブと長老たちは一つの提案をしました(22-25)。それはおそらく、パウロがエルサレムに来ることを聞いたときから相談していたことだったのでしょう。そうすることでパウロが決して律法違反者でもなく律法違反を教えている者でもなく、ちゃんと〈律法を守って正しく歩んでいることが、皆に分かるでしょう〉と。

パウロもヤコブたちの提案を受け入れました(26)。ここでは「あなたがたはいったい何をしているのですか」とは言いませんでした。〈こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい〉(Iコリント 10:31-32)とパウロは書いていました。パウロがヤコブたちの提案を受け入れたのは、ユダヤ人たちをつまずかせないことで、エルサレムの教会に神の栄光が現され、教会で〈神がほめたたえ〉られ続けるためだったのです。